



# HO1 マリー









この世界には魔法が存在し、私は『奇跡の痣』を持って生まれた。

痣を持つ者は魔法の素質があるという。

魔法は人智を超えた力であり、痣が奇跡だと言われるのも それが由来だ。

この痣は肩にあり、魔法使いや魔女には必ず持っている。

魔法を信仰し、魔法使いや魔女が所属する魔法教会というものがある。

私は生まれてからすぐ教会に預けられ、それ以来、過保護といえるほど大切に育てられた。

身の回りのことは侍女がしてくれて、ご飯はどれだけ食べてもよくて、ただ、教会の外には出ていけないと、先生はいう。

先生は、私にいろいろなことを教えてくれる教会の人間 だった。

文字や立ち振る舞いはもちろん、言語学、数学、薬学、医学——。

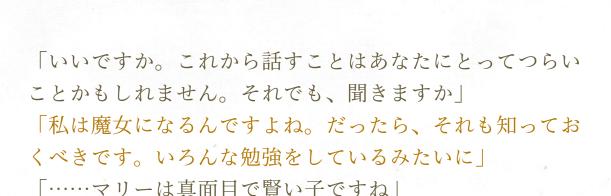
数えたらきりがないほどの分野を先生から教えられた。

## 魔法を扱う者について

「先生。どうして外へ出ちゃだめなんですか?」 「痣があるからですよ」

「どうしてですか? これは、奇跡なんですよね」





先生は言った。

魔女、魔法使いは奇跡に近い魔法という力を持っている。 また何百年と生きることができ、その存在は人の枠を超え ている。

それゆえに、人々からおそれられていた。 しかし、それ以外はふつうの人となんら変わらない。 傷つけば血が流れ、刺されれば死ぬ。

「先日、一人の魔法使いが殺されました」 「どうしてですか?」

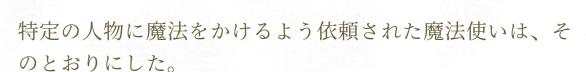
「理由などありません。ただ、おそろしいからと、それだけです」

## 「なにか悪いことをしたから、でもなく?」

「はい。むしろ、彼は素晴らしい魔法使いでした。困っている人々を助け、手を差し伸べていた。それでも殺されてしまうのです。魔法を扱う者は、人間たちにとってそういう存在なのです」

別の魔女は、その力を自分だけのものにしようとした人間に監禁された。





しかし、魔法をかけられた人に逆恨みされて殺されることもあった。

魔法をかけられた人間も、人々からおそれられる存在だからだ。

魔法教会も度々暴動に遭うこともあったという。

「でも、そんなことをする人間はごく一部です。教会には 毎日何十人もの人が救いを求めて訪れますから」

## 「魔法がこわいのに、魔法に頼るんですね」

「ええ。それほどまでに、素敵な力なのですよ。そして、マリー」

#### 「はい、先生」

「肩に痣を持つ子どもが襲われた例もあります。だから、 今のあなたは外へ出てはいけないし、魔女になることも 言ってはいけません」

## .....

「おそろしくなりましたか?」

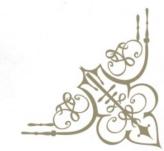
#### 「少しだけ」

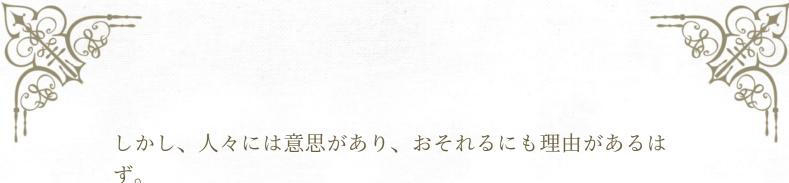
「あなたは素直で、いい子ですね」

どれだけ人がこわくても、私は奇跡の痣を持つ者だ。 いずれは魔女になり、その魔法で人々を助ける旅に出ることになる。

それが教会の教えで、私の人生の指針だ。







私も一方的にこわがるのではなく、そのおそれに歩み寄るべきなのではないかと思った。

先生は言った。

「どれだけおそれられようとも、良い魔女であり続けなさい。マリー」

## 儀式について

魔女になるための儀式は、十三歳から十四歳の間に行われる。

山奥にあるという儀式の場所は、教会でも一部の者しか知らない。

その近くにある小屋に七日間滞在し、教会から司祭がやってきて儀式を受けるのだという。

魔女になるまでは、魔女に関することを口にしてはいけないと言いつけられた。

# 教会を出発した日

十三歳になって半月が過ぎた。

私もそろそろ儀式を受けるための修行をする時期だといわれ、はじめて教会の外へ出ることとなる。

痣が見えないよう黒い長袖のワンピースに着替えた。



保存がきく食料を持たされ、馬車で山のふもとまで向かった。

それからは徒歩で山道を登るようにいわれ、一人、目的地の小屋へ向かった。

さざめく木々と小鳥の声は遠く響いている。 そんな小屋に着くころには、もう辺りは暗くなっていた。

途中で点けたろうそくを持って中へ入ると、床に血痕のようなものが付いている……。

乾いてはいない。

最近付いたもののようだ。

獣かなにかが迷い込んでいる?

血の跡を追うと、扉の前にたどり着いた。

おそるおそる扉を開けようとすると、中から「開けるな」 と人の声がして、思わずドアノブから手を離したのだった。

## ロールプレイの指針

あなたは幼いころから先生に言葉を教わっていたため、敬 語で話すようになった。

勤勉で素直な性格だが、必要であれば嘘をつくこともある だろう。

魔法を扱う者は人々からおそれられるため、その話はなる べく話さないほうがいいかもしれない。



